

2区では石組井戸S E 3015（16世紀前半）が調査区北東端に位置し、その南西に掘立柱建物、土坑、ピット群が見られ、遺物はこの範囲から集中して出土する。調査区中央から西端にかけて出土遺物は見られない。この間については、小穴が多く見られるが近現代の耕作等による攪乱が多くを占めているため、中世の遺構密度は希薄と考えられる。

3区では掘立柱建物が調査区北東に位置し、その周辺にピット群が見られる。建物より南西側では遺構が希薄になる。

これまでの調査成果を総合的に検討すると、野添大辻遺跡における中世Ⅳ期の屋敷地の内部構造は、建物の北東・東側に井戸を配する傾向が見られる。また、第3次調査で確認された掘立柱建物は40m程の間隔で配置されていることが指摘できる。概ね等間隔で屋敷地が区切られ、各屋敷地に建物と井戸が配置される内部構造であったと考えられる。

## 2 泥塔の位置づけ

### （1）泥塔供養

泥塔供養は平安時代末から鎌倉時代にかけて天皇、貴族、武士などの支配階級が願主となり、怨霊調伏、病氣平癒、安産等の願いを叶えるために土製の小塔を量産し供養した仏教習為である<sup>(2)</sup>。平安時代には「泥塔供養作法」にのっとり、泥塔が作られたことが『仏説造塔延命功德経』に説かれていて、こうした作法に基づき量産される<sup>(3)</sup>。支配者層が願主となり泥塔を量産し、寺院などの宗教施設へ一括して納めることで供養を行ったと考えられる。この時期の泥塔は1箇所でも多数まとり発見される特徴がある。

室町時代以降になると、全国的に少数で発見される事例が増加することから、この時期の泥塔は量産された後に流通し始めると想定される。さらに、遺

第9表 偏平舟形光背宝塔型泥塔一覧

No.	所在地	発見場所	発見状況	分類	遺構の時期	長さ (cm)	底部幅 (cm)	最大厚 (cm)	底部孔 形態	底部孔幅 (cm)	底部孔深 (cm)	宝塔軸部の 梵字・仏	出典等
1	三重県伊勢市	松原泥塔出土遺跡	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		10.4	5.6	2.5	—	—	—	梵字(キリク)	註4・14
2	三重県伊賀市	将軍塚1号	塚状遺構(石に囲まれ安置)	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀後半～16世紀前半	9.5	4.9	1.7	無			梵字(キリク)	註7
3	三重県伊賀市	常福寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		9.5	4.6	1.7	—	—	—	梵字(キリク)	註4
4	三重県名張市	貴福寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		9.6	4.7	1.6	—	—	—	梵字(キリク)	註4
5	三重県名張市	丈六寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	不明	註4
6	奈良県奈良市	平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡第424次	井戸SE16出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	17世紀前半	(4.8)	(4.2)	(1.8)	—	—	—	不明	註8
7	奈良県桜井市	山田寺	溝SD223出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	13～15世紀	(5.2)	—	(1.8)	—	—	—	不明	註10
8	奈良県桜井市	文殊山	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	不明	註4
9	奈良県高市郡高取町	束明神古墳	盗掘坑出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀	9.7	4.5	1.6	無			梵字(キリク)	註9
10		束明神古墳	盗掘坑出土	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型	15世紀	9.9	4.9	1.6	無			梵字(キリク)	
11	奈良県吉野郡吉野町	金峯山寺	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		—	—	—	—	—	—	梵字(キリク)	吉野町立吉野歴史資料館展示
12	鳥取県東伯郡琴浦町	船上山麓	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅰ型		10.4	5.1	1.9	無			梵字(キリク)	註2
13	愛知県清須市	清州城下町遺跡	溝SD4039出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	15世紀後半～16世紀初頭	(6.8)	3.4	2.1	有 不明	—	—	梵字(ウン、タラーク)阿闍如来虚空蔵菩薩	註11
14	愛知県愛西市	木曽川左岸	表採	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		(5.6)	(3.2)	1.9	有 円形	0.4	0.2	多宝如来坐像	註15
15	三重県亀山市	正法寺山荘跡	遺物包含層出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	15世紀後半～16世紀前半か	7.6	3.4	1.6	無			多宝如来坐像	註12・15
16	三重県松阪市	宝蔵寺跡	不明	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		(8.3)	4.4	(2.5)	有 楕円形	0.4×0.2	—	梵字	註16
17	三重県伊勢市	等観寺	伝世品	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		8	3.4	2	有 円形	0.4	0.5以上	多宝如来坐像	註15・17
18	三重県度会郡大紀町	野添大辻遺跡	柱穴出土	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型	16世紀前半	8.7	3.5	2	有 楕円形	0.4×0.3	2.3	梵字(ア)多宝如来坐像	本報告
19	京都府相楽郡笠置町	笠置寺経塚	表採	偏平舟形光背宝塔Ⅱ型		—	—	—	有 円形	—	—	多宝如来坐像	註15、京都府立山城郷土資料館展示

※「長さ」「底部幅」「最大厚」の( )内の数値は残存長を示す。「—」は不明を示す。

跡の出土事例では寺院等の宗教施設以外にも集落跡で発見される。泥塔供養が支配階級のみならず民衆へと広まり、少数の泥塔で供養を行う信仰形態へと変化したことが指摘される<sup>(4)</sup>。

## (2) 泥塔の分類 (第30図)

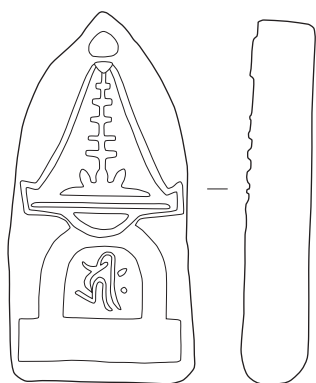
野添大辻遺跡出土泥塔の分析にあたり、各地の泥塔を分類し、その分布状況から考察する。泥塔の分類は畑氏により総合的な分析がなされており、大きくはこの分類に従うが一部名称に修正を加えた。泥塔は立体形と偏平形の2つに分けられる<sup>(5)</sup>。

**立体泥塔** 方形、円形のもので立体的に塔を表現したもの。

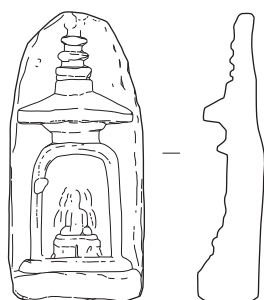
**偏平泥塔** 板状で片面あるいは両面に塔を平面的に表現するもの。塔の形や種子が凹凸をもって表現するものも含む。

野添大辻遺跡の泥塔は偏平泥塔に分類される。また、三重県内における中世後期以降の泥塔は偏平泥塔であるため、こちらの詳細な分析を進める。偏平泥塔は大きく3つに分類される。

**A 偏平板五輪塔形** 輪郭で五輪塔形を表現し、



偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔 (將軍塚1号 森川他 1982 改変)



偏平舟形光背宝塔Ⅱ型泥塔 (正法寺山莊跡 伊藤 1993 再トレース)



## 第30図 偏平舟形光背宝塔型泥塔分類図 (1:2)

両面あるいは片面の各輪に五大種が1字ずつ押されるもの。さらに、構図により2つに細別される。

**A1 偏平板五輪塔Ⅰ型** 梵字あるいは梵字と字だけのもの。全長6.5cm前後がⅠa型、8~10cmがⅠb型となる。

**A2 偏平板五輪塔Ⅱ型** 梵字あるいは梵字と字、蓮弁模様装飾が施されるもの。

**B 偏平板宝塔形** 輪郭で宝塔を表現し、両面あるいは片面に梵字、字が押されているもの。

**C 偏平舟形光背宝塔形** 舟形光背形の土版に宝塔形が表現され、塔身に梵字を陽刻したもの。

野添大辻遺跡の泥塔は偏平舟形光背宝塔形に該当する。畑氏の分類では偏平舟形光背宝塔形の細別はなされていないが、細別により地域的な傾向が指摘できるため、筆者が以下の通り分類を行った。

**C1 偏平舟形光背宝塔Ⅰ型** 舟形光背形の土版で縦断面形が偏平なもの。正面には浅い凹凸で宝塔が表現され、宝塔の軸に梵字が見られるもの。

**C2 偏平舟形光背宝塔Ⅱ型** 舟形光背形の土版で縦断面形は正面が立体で、背面と側面、底部が偏平なもの。正面には立体的に宝塔が表現され、宝塔の軸に梵字や仏が見られるもの。野添大辻遺跡の泥塔は偏平舟形光背宝塔Ⅱ型にあたる。

## (3) 偏平泥塔の分布 (第9表)

偏平泥塔の内、偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は12例、偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は7例確認できる。偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は奈良県と三重県の伊賀盆地で多くの分布が見られる。他地域への広がりには鳥取県船上山麓で1点のみであることから、奈良から伊賀地域の比較的狭い地域が流通の分布であったと言えよう。

偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は三重県の伊勢地域を中心に分布し、愛知県尾張地域や京都府山城地域にも広がりを見せる。偏平舟形光背宝塔Ⅰ型と同様に狭い地域が流通範囲と考えられ、この他の地域では同型の泥塔は確認できていない。

偏平泥塔の分布は、偏平板五輪塔形は福島県から島根県・高知県と広い範囲で見られ、偏平板宝塔形は兵庫県が中心となる<sup>(6)</sup>。さらに、発見基数では偏平板五輪塔Ⅰa・Ⅱ型、偏平板宝塔形は1箇所から多数まとまり発見される例が多く、偏平板五輪塔Ⅰb型は少数で発見される特徴があると指摘される。

#### （４）出土事例の検討

野添大辻遺跡の泥塔は掘立柱建物の柱穴から正立状態で出土した。柱の抜き取り後に柱穴へ安置されたものと考えられる。偏平舟形光背宝塔型泥塔の出土状況をまとめ、時期や出土遺構の性格を検討する。

**将軍塚 1 号（三重県伊賀市）** 塚状遺構より偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔が出土。塚状遺構の中心部において表土下30～40cmの層で石に囲まれて安置された状態が確認された。中心部の表土下25cm程で陶器類、50～60cm程で土師器皿が出土しており、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる<sup>(7)</sup>。

**平城京左京四条六坊十四坪・奈良町遺跡（奈良県奈良市）** 調査では奈良～江戸時代までの遺構・遺物が確認された。井戸 S E 16 から偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔と17世紀前半の土師器、瓦質土器、陶器等が出土している。泥塔の上部が残存し相輪、宝鎖が確認できる<sup>(8)</sup>。

**束明神古墳（奈良県高取町）** 中世の盗掘坑の入口付近で偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔 2 基が置かれた状態で出土。盗掘坑の堆積土からは15世紀のものと考えられる小型瓦器碗が出土しており、同時期のものと指摘される。泥塔は盗掘後に供養のために置かれたものと見られる<sup>(9)</sup>。

なお、2 基の泥塔は正面に宝塔と梵字（キリーク）がある構図となるが、宝塔の形態に若干違いが見られる。別型で作成されたものと考えられる。

**山田寺（奈良県桜井市）** 13世紀～15世紀の土器を含む溝 S D 223 から偏平舟形光背宝塔Ⅰ型泥塔が出土。泥塔は上半分が残存しており宝珠、相輪、宝鎖、露盤、笠が確認できる<sup>(10)</sup>。

**清州城下町遺跡（愛知県清須市）** 旧五条川に並行して設けられた溝 S D 4039 から単体で偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が出土。S D 4039 は旧五条川の河川空間と生活域の境界溝とされ、遺構変遷の状況から城下町Ⅰ期（15世紀後半～16世紀初頭）と位置づけられる。

旧五条川の時期は15世紀後葉から16世紀前半と見られる。出土遺物には柿経や妙法蓮華経、金剛般若経を書写した卒塔婆、無数の刀傷のある頭骨等があり宗教的な場であった事が推定される<sup>(11)</sup>。

泥塔には宝塔、梵字、仏が立体的に表現されてお

り、野添大辻遺跡の泥塔と類似する。しかし、宝塔の軸内には二仏（阿閼如来、虚空蔵菩薩）とそれぞれの頭上には梵字があり、構図に差異が見られる。

**正法寺山荘跡（三重県亀山市）** 第8次調査の包含層より偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が出土。山荘跡存続期（15世紀後半～16世紀前半）と山荘跡以前（13世紀）の2期の遺構が確認された<sup>(12)</sup>。他の遺跡における偏平泥塔の時期を踏まえると、前者の時期にあたると思われる。泥塔には宝塔、仏像が確認でき、梵字の有無は不明瞭であるが、野添大辻遺跡と同型のものである。

**笠置寺経塚（京都府山城町）** 笠置寺経塚は奈良時代からの弥勒信仰の霊場で、平安時代後期の土製経筒や銅製経筒、松鶴鏡、青白磁合子等の一括遺物がある<sup>(13)</sup>。偏平舟形光背宝塔Ⅱ型が表採されているが、時期は不明である。泥塔には宝塔、仏像が確認でき、梵字の有無は不明瞭であるが、野添大辻遺跡と同型のものである。

以上の出土事例の検討から、偏平舟形光背宝塔Ⅰ型は15～16世紀が初現で17世紀まで継続し、偏平舟形光背宝塔Ⅱ型は15～16世紀のものと考えられる。出土状況を整理すると寺院、経塚、塚状遺構といった信仰に関する場、城下町や門前町、集落といった生活に関する場に分類できる。後者でも野添大辻遺跡や清須城下町遺跡は生活域における祭祀に関わるものであろう。

偏平板五輪塔Ⅰb型についても上記のような2つの出土パターンが指摘されており、中世後期における泥塔利用の特徴と位置づけることができる。

泥塔は中世前期において支配階級による供養に限定されていたが、中世後期には寺院等の宗教施設（それに関連する施設）で生産された後に地域へ流通し、各地で地鎮や祭祀等に利用されたと考えられる。より下位の民衆レベルまで広がる中で、信仰の中心がこうした人々へと変化したと見られる。出土事例が限定されることから、比較的上位の階層や富裕層が用いたものであっただろう。

#### （５）まとめ

野添大辻遺跡は熊野脇道沿いの一般的な埵村であるが、出土遺物には瓦質風炉や泥塔といった重要遺物が見られる。風炉は京や堺といった都市部、地方

では城館や寺院、湊などの集散地で出土が多く、一般集落には見られないという。こうした出土遺物の特性から付近に有力者の居館が存在したことや上位の階層・富裕層にあたる人物の存在が考えられる。

また、こうした重要遺物の流通の背景として、多気と奥伊勢・熊野の結節点となる集落であったことや、伊勢地域に所在する全国屈指の経済都市である山田の影響が想定される。都市部からの経済的・文化的影響が野添大辻遺跡のような街道沿い集落へも波及していたのであろう。

### 3 結語

野添大辻遺跡の発掘調査によって、宮川中流域の段丘上に展開する縄文時代早期の集落、中世における熊野脇道沿いの集落の姿が明らかとなった。今後、工事に伴う立会調査も随時継続するが、本報告において一区切りとなる。

本報告では偏平舟形光背宝塔型泥塔のみの検討に留まったが、偏平泥塔の出現時期と分布、出土状況を近年の出土事例を踏まえて考察を行うことが課題である。個別の分析では、泥塔は型作りという特徴から同型品の検討が可能と考える。遺跡や地域間での同型品の特定により、生産と流通の実態がより詳細に現れ、地域社会の姿が浮き彫りとなることであろう。また、瓦質風炉や泥塔といった重要遺物について全国的な比較、検討を進めることで本地域と熊野脇道を行きかう人々の姿がより鮮明なものになるであろう。

#### 註

(1) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所「Ⅴ 山科本願寺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』、京都市文化市民局、2015年

(2) 畑 大介「泥塔の用途をめぐる一、二の視点について」『山梨考古学論集』Ⅰ、山梨考古学協会野沢昌康先生頌寿記念論文編集委員会、1986年

(3) 伊藤久嗣「続「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館研究紀要』五、斎宮歴史博物館、1996年

石村喜英「瓦塔と泥塔」『新版考古学講座』第8巻特論〈上〉、雄山閣出版株式会社、1971年

木下密運「小塔」『仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆、雄山閣出版株式会社、1976年

久保常晴「仏教」『新版考古学講座』第8巻特論〈上〉、雄山閣出版株式会社、1971年

(4) 畑 大介「偏平形泥塔について」『山梨県考古学論文集』Ⅱ、山梨県考古学協会10周年記念論文編集委員会、1989年

畑 大介「偏平形土製五輪塔の性格をめぐる」『甲斐中世史と仏教美術』、植松又次先生頌寿記念論文集刊行会、1994年

(5) 註4前掲

(6) 註4前掲

(7) 森川桜男 北出楯夫 山田 猛「伊賀の將軍塚」『伊賀郷土史研究』8、伊賀郷土史研究会、1982年

(8) 奈良市教育委員会「3. 平城京左京四条六坪十四坪・奈良町遺跡の調査 第424次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成11年度、2001年

(9) 河上邦彦編『束明神古墳の研究』樫原考古学研究所研究成果 第2冊、奈良県立樫原考古学研究所、1999年

(10) 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所『山田寺発掘調査報告』奈良文化財研究所学報第63冊、2002年

(11) 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『清須城下町遺跡』Ⅳ、1994年

(12) 関町教育委員会『史跡正法寺山荘跡発掘調査報告 昭和59年度』関町埋蔵文化財調査報告Ⅷ、1985年

(13) 京都府立山城郷土資料館『南山城の歴史と文化』展示図録24、2002年

(14) 岡田 登「242 松原泥塔出土遺跡」『伊勢市史』第6巻考古編、伊勢市、2011年

(15) 伊藤久嗣「「泥塔」小考」『斎宮歴史博物館研究紀要』二、斎宮歴史博物館、1993年

(16) 松阪市史編さん委員会「5 松阪市出土の泥塔」『松阪市史』第3巻史料編 古代・中世、1980年

(17) 伊勢市立郷土資料館『伊勢の経塚』特別展図録 第5冊、1991年

津田守一「三重県伊勢市出土の泥塔について」『古代文化』第56巻第8号、財団法人古代学協会、2004年